

怪談 母子やなぎ

●羽鳥

羽鳥湖畔の馬鹿つき坂のところから、ひじりヶ岩に通ずる道を約一キロ、右側のくぼ地に一風変わった柳がある。わたらの山小屋に、下白子の七男（仮名）が、昭和三十八年に泊ったとき、毎夜、幽霊に悩まされた因縁ばなしをお伝えしたい。

七男が新の仕事でこの小屋を宿にした夜の十時頃、誰やら柳の下に忍びよりの「早くおいで」と呼んでる様子。相手は幼い子供らしく、すすり泣き泣きひそひそばなし。

七男はハッと驚き、声するあたりを覗いて見たが、話声は急に止み、人影どこ

ろか何一つとして見当たらず、森閑として風もないのに柳の枝がふわりふわりと動いている。七男は毎夜同じような出来事に、ただならぬ不思議を感じ、いったん山をおりて、それとなく様子をさぐってみたところ、なんと、次のような奇怪な事件を知った。

会津生まれの若夫婦が六歳の男の子を間に、この地に炭焼き暮らしを立てたのが明治の初め頃。美ぼうの妻オタキは、稀に見る働き者であったが、一面、燃えて一途なところもある女。

ある日、オタキは馬鹿つき坂のところ

民話 3

泉道を尋ねられ、一瞬オタキの心には異様に波打つものがあった。その後のことである。彼女の行方は杳として知れず、京にのぼったとうわさも立った。妻想いの夫は山中での事故死と思い込み、悲観のあまり気が狂い、子を炭ガマの中に入れて焼き殺し、自分も谷間へ身を投げ後を追った。七男が泊まった山小屋は、この凶行のあった炭ガマの跡地に建てられたものであったという。

心ひかれて京に走ったというオタキも所詮は人の母、ざんげといとしさに、彼女の霊が舞い戻り、毎夜「子」の焼死の

時刻に訪ねきて、何十年も吾子を悼みつけていたのであろう。

七男は白子の菩提寺吉祥院に金子と米、酒などをもち、お布施・引導を乞い、ねんごろに供養した。

七男は再びこの山小屋に戻り、泊りながら仕事を続けていたが、その後は全く不思議なことが少しもおこらず、彼らの迷いの霊も、これで、天国とやらで成佛したに相違ない。

(稿者 石井寅之助)

『天栄村の民話と伝説』から

